2023・2024年度 研究紀要

「つくる」がうまれる暮らし

お茶の水女子大学附属幼稚園

はじめに

このごろ、空き箱がとても気になります。また、牛乳パックも気になります。以前は、お役目をおえると、箱はたたんで、牛乳パックは開いて洗って干して、そして資源ごみでした。でも、今は資源ごみには見えなくなってきました。というのも、幼稚園では、それらにたくさんの可能性があり、さまざまなものにうまれ変わっていることが大切にされているからです。

幼稚園では、毎日いろいろなものがつくりだされています。空き箱も、牛乳パックもどんどんいろいろなものに、うまれ変わっていきます。空き箱はお家になり、牛乳パックは電車になります。そして、家や電車が走っている街ができていくのです。ちなみに、幼稚園での牛乳パックの電車はというと、東京駅に停まっているような 13 両や 15 両もある電車になったりするのですが、しかもそれが廊下を疾走しています。

もちろん、それだけではありません、お庭の葉っぱや椎の実や砂場の砂、さまざまな紙やテープ、そういったものも、次々に変身していくのです。こうして、いろいろなものがつくりだされ、その姿を変身していく中で、そのつくり手たちも変容していきます。幼稚園の「つくる」という行為は、つくられるモノも、つくり手のヒトもともに変化していくプロセスです。

今回の研究テーマは、この「つくる」に焦点をあてたものです。そして、重要なことは、この「つくる」というテーマは、これまでの、「透明」や「道具」といったテーマの積み重ねの上にあること、そしてこのような「つくる」プロセスは、自然発生的にうまれるものではないことだと思います。幼稚園では、「子どもへの願い」を基本として、教育課程を作成され、そして、研究テーマを探る記録、日々の記録、園内研究会の記録といったものにみられる、先生たちの対話の積み重ねの中で、「つくる」ということが支えられていることだと思います。

今回の研究がこのような形でまとめられたこと、そして、これが広く皆様のお手元にとどくことを大変嬉しく存じます。そして、お読みくださった方々から忌憚のないご意見をたまわれますことを祈念して、次の課題に取り組んでまいりたいと考えています。

お茶の水女子大学附属幼稚園　園長　小玉亮子

「つくる」がうまれる暮らし

目　次

はじめに

第１章　研究について …… 4

１．これまでの研究の流れから

１）教育目標の見直し

２）教育課程の見直し

３）２つの接続期（入園接続期・幼小接続期）カリキュラムを編成して

２．2023・2024 年度の研究「『つくる』がうまれる暮らし」について

１）研究テーマを決めた経緯

～「ものをつくる」ことを大切にしてきたことから～

２）私たちの「つくる」の定義と教師の援助

３）研究の方法

第２章　実践事例 …… 11

１．３歳児「せなかにつけたいの」

２．４歳児「ヒーロー帽子をつくりたい！」

～３・４歳児のまとめ～

３．５歳児「電車の街」

～５歳児のまとめ～

第３章　研究のまとめ …… 30

１．私たちの保育の基盤になっている教師のまなざし

～子どもの表現を肯定的に受けとめていく～

２．子どもたちの「つくる」表現について

～事例から見えてきたこと～

３．子どもたちの「つくる」を支えていること

～もの・空間（場）・時間の保障～

研究に寄せて …… 35

お茶の水女子大学　助教　辻谷　真知子

おわりに

参考文献 …… 38

おわりに

2022年度に実質5年に及ぶ文科省開発研究指定の最終報告を終えた。その間も本園の研究の進め方である子どもたちの遊びや姿から研究課題に言及してきた成果は、「これまでの研究の流れ」をお読みいただきたいが、5年間同じテーマで語り合い、深め合ってきた日々はとても貴重であった。その上で2年かけて「『つくる』がうまれる暮らし」を紀要にまとめるに到った。

この2年の間、つくる子どもの姿に目が行き、心もちを慮り、さて教師としてどう関わろうかと考え関わり、うまれたことを振り返り、を繰り返してきた。「つくる」には、ものも場も、人や環境との関係も含まれるため、研究の方向性が広がりすぎてしまい、「ものや場をつくる」ことに注目しようという流れになった時期があった。それでも大勢で暮らす以上、人や環境との関係を切り離すことは難しい。その時に、本学辻谷先生から助言をいただき「ものをつくる」に到るプロセスを振り返る形で、研究テーマに言及していこうという方向性がきまった。

さて、本園に限らないと思うが、子どもはよくつくっている。必要感も、思いつきも、表現も一人ひとり違っている。それを子どもたちも教師も、近くで、遠くで見ている。つくりたい気持ちに応えようと見守ったり手を添えたり、一緒に悩んだりしている。

園児用のイスを重ねて高低差を出し、板を渡して線路をつくっている。何種類もの牛乳パック製の電車を走らせるには何階建てにもしないと同時に走らせられないものね、と納得する。

降園後、保育室に丸だけが描いてある画用紙が何枚も落ちていた。虫好きのその子どもは自分の描きたい虫のイメージにぴったりの丸が描きたかったのだろうと想像する。

子どもも教師も、それぞれのしていることを大切にする。同じコミュニティの中で暮らすこの関係性の中で、「終わりにしてもまた新しく何かをうみだしてくことができるという希望につながっていく」とまとめで述べられる「暮らし」がここにはある。教師のまなざし、教師間の連携に着目し、登園してから帰るまで自らの興味や関心に沿った遊びに取り組むという暮らしに意味をもたせ、まとめとしている。

お読みいただきありがとうございました。つくること、子どものこと、暮らしのこと、いろいろな方々と語り合いたいと思っております。ぜひご意見を賜れますようにお願いいたします。

最後になりましたが、ご指導いただきました辻谷真知子先生、たくさんのご示唆をいただきました学校評議員の先生方*、研究について一緒に考えてくださった保護者のみなさま、そしてこの園舎に暮らす子どもたちに感謝をお伝えしたいと思います。心より、ありがとうございました。

副園長　髙橋陽子

学校評議員の先生方*　酒井朗　佐藤知洋　柴田光規　田代和美　田丸秋穂　戸部美子　藤崎宏子（敬称略）

＜参考文献＞（※著者名の50音順で記載）

○大宮勇雄（2010）『学びの物語の保育実践』ひとなる書房.
○加藤繁美（2007）『対話的保育カリキュラム上』ひとなる書房.
○加藤繁美（2008）『対話的保育カリキュラム下』ひとなる書房.
○川田学（2019）『保育的発達論のはじまり―個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ』ひとなる書房.
○倉橋惣三（2008）『育ての心（上）』フレーベル館.
○倉橋惣三（2008）『育ての心（下）』フレーベル館.
○佐伯胖・井桁容子（2021）『子どもって、みごとな人間だ！―保育が変わる子どもの見方―』フレーベル館.
○佐伯胖編著（2023）『子どもの遊びを考える―「いいこと思いついた！」から見えてくること』北大路書房.
○津守真（1979）『子ども学のはじまり』フレーベル館.
○津守真（1980）『保育の体験と思索―子どもの世界の探究』大日本図書.
○宮里暁美・田島大輔・松本信吾（2024）『「ずれ」を楽しむ保育　見方がひろがる研修・学び合い』中央法規出版.
○山田剛輔・久保寺節子・佐伯胖（2024）『時間割から子どもと一緒につくることにしてみた。』学事出版.
○レイチェル・カーソン，上遠恵子訳（1996）『センス・オブ・ワンダー』新潮社.
○お茶の水女子大学附属幼稚園（2018～2022）『幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園の教育課程（3歳児～5歳児）の編成及び保育の実際とその評価の在り方についての研究開発』（第1年次～第4年次）

〈研究同人〉

園　　長	小　玉　亮　子	副　園　長	髙　橋　陽　子
教　　諭	伊　川　千　晶	教　　諭	伊　藤　綾　子
教　　諭	佐々木　麻　美	教　　諭	佐　藤　寛　子
教　　諭	杉　浦　真紀子	教　　諭	田　村　　郁
教　　諭	灰　谷　知　子	教　　諭	谷　地　理　沙
養護教諭	渡　邉　満　美	非常勤講師	大　江　由布子
非常勤講師	黒　瀬　愛　佳	非常勤講師	戸　田　実　穂
非常勤講師	西　本　加奈子	非常勤講師	青　山　理　恵

2023・2024 年度
お茶の水女子大学附属幼稚園研究紀要
「つくる」がうまれる暮らし

2025 年 2 月 2 日

発　行　　お茶の水女子大学附属幼稚園
〒112-8610　東京都文京区大塚 2-1-1
TEL　03-5978-5881
FAX　03-5978-5882

印　刷　　有限会社サンプロセス
〒207-0012
東京都東大和市新堀 1-1435-29